思想と文学の現在――政治社会状況のなかで

綾目広治

一　『種蒔く人』の可能性と読み直されるべき思想家

二〇二一年は『種蒔く人』が創刊されて一〇〇周年にあたるが、今日において『種蒔く人』を読んで驚かされるのは、その広やかな多様性である。たとえば、元号で言う戦前昭和期の社会変革運動では批判されることになった知識人（知識階級）の存在を、『種蒔く人』ではむしろ積極的に認める論説を載せていた。あるいは、戦前昭和期の変革運動はマルクス主義というよりもボリシェビズムに一本化されていったのだが、しかし『種蒔く人』は「アナキズム」も「センヂカリスム」（サンディカリスム）も認め、芸術家は「ソシアリストであり、アナキストであるのが当然である」（津田光造）ともされていた。つまり『種蒔く人』は、社会変革運動において、「ソシアリスト」や「アナキスト」、知識人も包含する「共同戦線」を目指していたのである。

したがって芸術についても、第九号の「社論」では、「自覚せる芸術家の動員は共同戦線といふ作戦上の見地からして、必ずしも無効なものではないと信ずる」というふうに述べられていた。しかし、やがて戦前昭和期のプロレタリア文学運動では〈前衛の眼を持て！〉ということが言われ出し、文学者も政治的職業革命家であるべきだとされて、結局は文学活動を狭いものにし、延いては政治活動の幅をも狭めていったのであった。それと違って、『種蒔く人』は実に広い可能性を持とうとしていた。そのことは、たとえば武者小路実篤の詩を掲載していたことからも窺われるだろう。『種蒔く人』は『白樺』派にあるような人道主義と呼ばれる思想をも包摂しようとするものだったのである。

また『種蒔く人』は、フランスのバルビュスらが起こした、国際平和運動であるクラルテ（光明の意）の影響があって、当初よりコスモポリタニズム志向があったわけだが、それととも

に『種蒔く人』には「地方欄」という投稿欄が設けられていたことに注意される。つまり『種蒔く人』は、インターナショナルな志向とともに、ローカルな事柄に眼を向ける雑誌でもあった。それだけでなく『種蒔く人』は、「水平社運動」や「無産婦人号」、さらには「非軍国主義号」「農村」などの特集も組んでいて、社会の様々な問題に対してやはり広い目配りを持っていた。

もっとも、『種蒔く人』が広い視野から様々な問題に眼を向けているため、その志向性は単に雑多なもののように見られるかも知れない。しかし、ボリシェビズムに一本化されて痩せ細ったプロレタリア運動の末路を見るとき、もしも『種蒔く人』にあった広い可能性がそのまま伸張していれば、その後の社会変革運動においてもっと別様の在り方があったのではないか、と考えられるのである。

旧ソ連、東欧の「社会主義」の実験は失敗に帰したが、他方の資本主義も行き詰まっている。もしも、このまま現在の資本主義の在り方が続くなら、格差問題や地球環境の問題が人々の生活を破滅に導くことになることは確実である。格差問題では、今の日本では六人に一人の子供が貧困の状態にあり、環境問題では、気温上昇問題などはすでに一刻の猶予も許さないような状況である。にもかかわらず、全世界の、国政を担う政治家たちは、グローバル資本のやりたい放題を黙認しているだけである。というよりもそれに同調しているとしか言えないだろう。

スターリン主義的な旧来の「社会主義」には期待できないが、しかし『種蒔く人』のような広い可能性を持った社会変革志向は、省みられるべきであろう。たしかに『種蒔く人』も、雑誌発行の後半四分の三あたりからその多様性が失われていくが、しかし前半には確実にあった貴重な可能性に、百年後の今日こそ眼を向けるべきだ。今日において新たに見直され読み直されなければならないのは、『種蒔く人』のような雑誌だけでなく、思想家もそうである。その代表として、ここではマルクス、ラスキンについて述べてみたい。

労働状況が悪化して、非正規労働者だけでなく正規労働者も過酷な状況に追いやられているのが、今の日本社会の労働現場である。そのことは、経済記者の竹信三恵子『ルポ雇用劣化不況』（岩波新書、二〇〇九・四）や労働社会学の今野晴貴による『ブラック企業2』（文春新書、二〇一五・三）で述べられている事例からも知ることができる。たとえばブラック企業は、社員を採用後にすぐに管理職にすることで、残業手当を支払わず

に長時間労働させようとするのである。すなわち、「若い社員を「幹部」に仕立て上げることで、長時間働かせ、しかし残業代を支払わない」（今野晴貴）のである。コンビニ店長の多くは、竹信三恵子が述べているような「「名ばかり店長」の典型例」であろう。

このような事例を見ていると私たちは、社会福祉も福利厚生もほとんど顧慮されていなかった時代に舞い戻ったかのような思いを持つだろう。すなわち、マルクスが『資本論』第一巻第三編「絶対的剰余価値の生産」で述べている一九世紀イギリス産業社会の様相が、そのまま二一世紀の今日に当て嵌まるのだ。「絶対的剰余価値」とは単純には、労働者に賃金以上の労働をさせることで（多くの場合、労働時間の延長によって）、資本が得る剰余価値（収益）のことだが、マルクスはこう述べている、「ここでは（略）労働力の一日の可能なかぎりの最大の支出が、たとえそれがどんなに不健康で無理で苦痛であろうとも、労働者の休息時間の限界を決定する。資本は労働力の寿命を問題にしない」（『マルクス・エンゲルス全集』大月書店版、『資本論』からの引用は、以下同じ）、と。

現在のブラック企業などは、まさに「絶対的剰余価値」の増加によって企業収益を向上させようとしている。それは、経済学者のシュンペーターが述べたような、イノベーション（技術革新など）によってコストを下げることで利益を上げるような面倒なことはしないで、労働者に過重労働をさせることで利益を得ようとするのである。今日の労働状況を正確に把握するために、私たちはマルクスを読み返すべきである。その読み返しに際しては、注意したいのはマルクスの論を再確認することに留まらず、マルクス思想についてのこれまでの認識を新たにする場合もあるということである。その更新は、とくに彼の革命観をめぐってである。

たとえば、マルクス思想の受容史の中では彼の革命観は、エンゲルスとの共著による『共産党宣言』（一八四八年）で語られた、プロレタリアートによる国家権力の奪取とプロレタリアート独裁による強行的な革命の遂行にある、というふうに受けとめられてきた。しかし、大藪龍介の論考「マルクス政治理論の転回」（伊藤誠他編『21世紀のマルクス　マルクス研究の到達点』〈新泉社、二〇一九・一二一〉所収）によれば、マルクスはその十数年後には協同組合運動を重視する革命路線を考えるようになっていたのである。宣言文書「国際労働者協会創立」（一八六四年）で彼は、「協同組合運動」について、「これらの偉大な社会的実験の価値は、いくら大きく評価しても評価しす

ぎることはない」と述べ、また文書「中央評議会代議員への指示」では、「協同組合運動」の「大きな功績」は、「窮乏」を生み出す資本の「専制的制度」を「自由で平等な生産者の連合社会という、福祉をもたらす共和的制度とおきかえることが可能だということを、実地に証明する点にある」（傍点・原文）と述べている。

そして『フランスにおける内乱』（一八七一年）で、マルクスはこう語っている。「もし協同組合的生産が（略）資本主義制度にとってかわるべきものとすれば、もし協同組合の連合体が一つの共同計画にもとづいて全国の生産を調整し、こうしてそれを自分の統制のもとにおき、資本主義的生産の宿命である不断の無政府状態と周期的痙攣（けいれん）を終わらせるべきものとすれば、――諸君、それこそは共産主義、「可能な」共産主義でなくてなんであろうか！」、と。協同組合運動が資本の支配体制を言わば蚕食していくようにして体制の変革を図る――これがマルクスが晩年に抱いた革命観である。

このように協同組合運動を徹底化させることで社会変革を行おうとした一人に、日本ではキリスト教社会運動家の賀川豊彦がいる。賀川は『人格社会主義の本質』（一九四九年）で、「協同組合は、マルクスが資本論に取扱ふ事を忘れた資本主義修正の最大機能である」と述べている。もちろん、賀川は先に見たマルクス晩年の発言を読む機会は無かっただろうから、彼がそう語るのは止むを得ないが、実は両者は最終的には接近していたのである。

現代日本で社会変革を志す人たちは、晩年のマルクスや賀川豊彦の思想をどれほど理解しているだろうか。心許ないものがある。さらには、賀川が影響を受けた思想家ジョン・ラスキンについても、怪しいであろう。ラスキンについては、哲学者の伊藤邦武が『経済学の哲学　19世紀経済思想とラスキン』（中公新書、二〇一一・九）で、彼が早くから自然や環境の疲弊や破壊に眼を向けていて、それらのことが人間精神の荒廃や思想的堕落と深く関わることを指摘していたと述べている。だから今こそ、ラスキンも注目されなければならない思想家なのだ。

こう見てくると、私たちは誤読や未読のまま、現代社会や現代思想を語ってきたのではないかと反省される。私たちは、近現代の思想家たちを新たな眼で読むことで、現在の問題を考えていかなければならない。では、現在の問題とは何か。それは端的には、新型コロナ禍と新自由主義および資本主義の問題であると言えよう。

二　新型コロナ禍と新自由主義および資本主義

文芸評論家の川村湊の『新型コロナウイルス人災記　パンデミックの31日間』（現代書館、二〇二〇・五）は、二〇二〇年の四月七日から五月七日までの日誌となっていて、新型コロナ関連の情報を丁寧に追いながら、新型コロナ禍の本質が「人災」であることを説得的に語っている本である。たとえば安倍晋三と小池百合子は、ともに同年二月下旬まではオリンピック・パラリンピック開催を優先させていたために、コロナ禍対策において初動の遅れをもたらしたことや、愚策としか言えないアベノマスクのために四六六億円も浪費したことなどを指摘している。もしも、いち早く対策を取れば被害は少なくなったはずだし、またアベノマスクで使われた四六六億円が医療現場に廻されていたならば、少なからぬ命を救えたであろう。川村氏の指摘はそれに留まらず、新型コロナ禍の背景には、「人間の過剰な環境破壊、大自然への闇雲な侵入、（略）無謀で不遜な〝地球〟への挑戦」があることも語っている。この問題をより突っ込んで展開しているのが、哲学と経済思想が専門である斎藤幸平の論考「コロナ・ショックドクトリンに抗するために」（『群像』、二〇二〇・六）である。

新型コロナウイルスが世界へ急速に拡散したのは、人類が地球システムにかつてない規模で介入するようになったこと、すなわちノーベル化学賞受賞者パウリ・クルッツェンの言う「人新世（アンソロポセン）」の時代だからだと言われることがあるが、斎藤氏はそうではないと語る。新型コロナ禍は、そういう超長期的な観点からの問題ではなく、資本主義こそが危機の確率を飛躍的に増大させた、その一つの結果であると述べている。たとえば、アグリビジネスが野生動物の生息地域を破壊したために、そこにいた未知のウイルスが人間社会に侵入することになったのである。斎藤氏によれば、多国籍企業は「その危険性を知っている」のだが、多国籍企業は目先の利潤を追い求めようとして「その危険性」を無視するのである。そして、危険な事態をより深刻化させたのが、いわゆる新自由主義であった。新自由主義下の緊縮政策は、保健福祉体制を縮小もしくは解体させたし、日本では国立感染研究所の人員や研究費が大幅に減らされたのである。そういう状況の中で、今回のコロナ禍が起こったのである。

コロナ禍は中国の武漢から拡がったとされているが、〈社会主義〉国家のはずの中国も、デヴィッド・ハーヴェイが『新自由主義　その歴史的展開と現在』（渡辺治監訳、作品社、二〇

〇七・二）で述べているように、「権威主義的な中央集権的統制と絡み合いながら新自由主義的な諸要素がますます組み込まれていく独特の市場経済が構築された」のである。今や世界中が、とくに北半球の世界では一部地域を除いて、ほぼすべてが新自由主義に覆われていると言えよう。その新自由主義がいかに環境破壊をもたらすかについても、ハーヴェイは同書で述べている。「豊富な森林資源を有している貧しい国々に対し、輸出を増大させて外国人の所有と利権を許可せよとの圧力をかけることは、最少限の森林保護さえも破壊することを意味する」、と。コロナ禍のパンデミックも、その究極の元凶は新自由主義にあると言えよう。

それでは、新型コロナ禍のような問題は、、たとえばノーベル経済学賞のJ・E・スティグリッツが『世界を不幸にしたグローバリズムの正体』（鈴木主税訳、徳間書店、二〇〇二・五）などで述べているように、新自由主義のような〈間違った資本主義〉を改めて〈正しい資本主義〉に戻れば解決する問題かというと、そうではないであろう。問題の本質は、新自由主義の大本である資本主義そのものにあると言わざるを得ない。旧ソ連、東ヨーロッパの〈社会主義〉政権が崩壊して東西冷戦が終結してから十数年の間には、〈もうマルクスは古い〉という声を聞くことがあった。その当時も私は、資本主義が続く限りマルクスの『資本論』は古びることはないと思っていたが、二一世紀に入って格差社会の問題が表面化するようになって、ますます『資本論』の認識は重要性を増していると言えよう。私たちは、『資本論』を武器にして資本主義の問題を改めて俎上に載せて考えなければならない。

そのための導きとなる書物が、この一、二年の間に出た。その一つに、書名もまさに『武器としての「資本論」』（東洋経済新報社、二〇二〇・四）という、白井聡の著書である。白井氏は、新自由主義が世界を覆っている現在の事態は、労働者や庶民たちが〈もう階級闘争なんかは古い〉と思っている内に、「金持ち階級、資本家階級はずっと階級闘争を、いわば黙って闘ってきた」結果だと述べている。そして、新自由主義は「文化になって」もいて、労働者たちはその価値観に「包摂」されている。白井氏は述べていないが、〈自己責任〉という考え方を人々が自明なものとして受け容れているのは、その端的な例であろう。人々は、社会が負うべき責任を個人に転嫁させていることに気づくことなく、貧しいのは自分が悪いからだと思い込んでいるのだ。

植村邦彦の『隠された奴隷制』（集英社新書、二〇一九・七）

は、近代資本主義の世界システムが成立するためには奴隷制プランテーションが不可欠であったが、しかし今も「「自由な労働者」というヴェールに覆われた「隠された奴隷制」がなければ資本主義は成り立たない」ことを説得的に論じた本である。この「隠された奴隷制」という言葉は、『資本論』第一巻の終わり近くで本源的蓄積を論じた章で用いられていて、マルクスは「賃金労働者」のあり方を「隠された奴隷制」と呼んだのである。普通には、企業で働くか否かは本人の自由であり自己決定であると思われている。なるほど奴隷のように強制はされていない。しかし、ほかにどういう選択肢があるかと言えば、例外的な場合を除いて、企業で働くしかないのだ。しかし、その選択は自らが自由に選んだかのように思ってしまう。このことが自己責任論に繋がって来るのだ。

さらにこの自己責任論は、「強制された自発性」とも重なってくる。「強制された自発性」という言葉は、植村邦彦も同書で述べているように、労働経済学が専門の熊沢誠が『株式会社ニッポンで働くということ』（岩波書店、二〇〇九・六）などで遣っている言葉であるが、自発的というのは外観であって、中味は実は強制なのである。だから、たとえば過労死という悲劇が起こるのだ。そして、過労死も自己責任とされるわけである。当人の自己管理が拙かった、と。因みに植村氏によれば、ローマ字表記の「karoshi」はすでに『オックスフォード英語辞典』に収録されている。こうして見ると、資本主義はまさに「隠された奴隷制」と言えよう。

先にもその論文に言及した斎藤幸平は、『人新世の「資本論」』（集英社新書、二〇二〇・九）という、新書ながら注記も含めて三七五頁の大部の著書を刊行しているが、この書においても『資本論』に今の資本主義を乗り越える鍵があり、また最晩年のマルクスは生産力発展主義から離れ、環境問題を深く考慮した思考を展開するに至ったことを説得的に論じている。この書は現代を考えるにあたって必読の書である。

コロナ禍問題に戻ると、ユヴァル・ノア・ハラリは『緊急提言　パンデミック』（柴田裕之訳、河出書房新社、二〇二〇・一〇）で、これに立ち向かうために「グローバルな団結の道」を呼び掛けている。たしかにその通りだが、さらに重要なのは、今の資本主義体制を変革する方向を模索することである。そうではあるのだが、私たちは人間存在そのものについて再考する必要があるのかも知れない。その問題を述べているのが、実は今言及したユヴァル・ノア・ハラリなのである。

三　ユヴァル・ノア・ハラリの提言――近未来とコロナ禍後

イスラエルの歴史学者であるユヴァル・ノア・ハラリの、世界的ベストセラーとなった著書『サピエンス全史』上・下は、七万年前の認知革命による現生人類＝サピエンス（賢人）誕生からこの二一世紀初頭の現在までの歴史を書き綴った本であった。この認知革命がもたらしたのは、人類が言葉を獲得したことで想像力による虚構が可能になったことであり、それはまた大勢の人々が共有する「共同主観」的な世界の構築が可能になったことだとハラリは述べている。ハラリによれば、「共同主観」的な世界も実は虚構なのであって、しかしこの認知革命によって、伝説や神話、宗教だけでなく、国家などの様々な組織が生まれることになったのである。たしかに、たとえば貨幣にしても人びとの「共同主観」によって成り立っていると言え、人間世界を形作っている、ほとんどすべてのモノは、ハラリの言うように「共同主観」による虚構だろう。国家などはまさに「共同主観」による「共同幻想」（吉本隆明）であろう。

これまでの人類史を大胆に虚構の構築史と見たハラリは、これからの人類史をも大胆に予測している。その著書が、邦題では「テクノロジーとサピエンスの未来」という副題のある『ホモ・デウス』上・下（柴田裕之訳、河出書房新社、二〇一八・九）である。その中で述べられている衝撃的な事柄の一つは、私たちを取り巻く状況などに私たちは大きく影響されるものの、根本的なところでは自らの自由意志で物事を選び決定していると私たち自身は思っているが、実はそうではないという指摘であろう。つまり、人間だけでなく生き物はすべてアルゴリズムであり、それは遺伝子と環境圧によって形作られているため、生き物はものごとを決定論的に判断して決めるか、でなければ単にランダムに決定を下すのであって、自由意志によって決定するのではない、というのである。

因みに、アルゴリズムという言葉は、コンピューターが普及してからはよく耳にするようになった言葉だが、これについてはハラリの説明が分かりやすいと思われる。すなわち、「アルゴリズムとは、計算し、問題を解決し、決定に至るために利用できる、一連の秩序だったステップのことをいう」。そして人間は、内面に自由意志を持った統一された人格ではなく、様々なアルゴリズムの集合体でしかない、というのである。そうなると、芸術も何か神秘的な霊感か超自然的な魂の産物ではなく、数学的パターンを認識するアルゴリズムの産物となる。こ

のような考え方は、フランス啓蒙時代のラ・メトリが主張した人間機械論をテクノロジカルに洗練した説とも言えるが、脳科学等の様々な知見を踏まえての見解であるから、説得的なものになっていると言える。

しかしそのことよりも、『ホモ・デウス』の中でさらに衝撃的な事柄は、人間がアルゴリズムの集合体であることを冷徹に認識した人たちが、この二一世紀に老齢や死を克服することを真剣に努力し始め、今度は人間をグレードアップして、ホモ・サピエンスをホモ・デウスに変えることを目指すだろうと述べていることである。デウスとはラテン語で神の意味であり、したがってホモ・デウスとは神人のことであるが、人間がアルゴリズムの集合体であるならば、才能や資質というものも操作可能になってくるだろうから、神人の域に到達することは不可能なことではないわけである。このあたりの主張を見ると、『ホモ・デウス』は進化論の最新版のようにも見えてくる。

そのことに眼を向けると、人（ホモ・サピエンス）を神人（ホモ・デウス）の域に引き揚げるというのは、やはり進化論の影響を受けた、北一輝の『國体論及び純正社会主義』における主張を思い起こさせる。この中で北一輝は、「社会主義とは人類と云ふ一種族の生物社会の進化を理想として主義を樹てる者なり」として、個人もやがて「類神人」に、さらに「神類」の域までに進化し、そこまで「進化」すれば「交接」行為も「排泄」行為も無くなるはずだと述べていた。ただ北一輝の場合、「神類」というのは、社会が社会主義に至った後に人びとに平等に訪れる在り方であった。

しかしながら、ハラリが述べているホモ・デウスは、一部の人間のみが到達できる在り方なのである。だから多くの仕事は、スキルを磨いた専門家とＡＩもしくはロボットで対処できることになり、ほとんどの人たちは不要になってしまう。多くの人びとは被搾取階級ですらなく、「無用階級」になるのである。人類は、未来においては、といってもそれほど遠くはない未来において、この「無用階級」と、身体も頭脳もグレードアップした専門家とに二分されることになるとする。もっとも、ハラリはそのことを肯定しているわけではない。果たしてそれで良いのか、と本書の末尾で問うているのである。さらには、そもそも「生き物は本当にアルゴリズムにすぎないのか？」と問い直すべきである、と。

もしも、社会が専門家階級と「無用階級」に二分されるようになったならば、これまでの社会とは様相が異なった社会となり、そこでは民主主義は省みられることはなくなるであろう。

民主主義は、たとえば選挙では一人一人の自由意志で投票することが建前になっているが、自由意志というもの自体が無いのだとされると、民主主義の元での選挙も成り立たなくなるであろう。その社会は、これまでの歴史に登場したような独裁社会ではないだろうが、反民主主義的な社会であることには間違いないであろう。ハラリはそれを望んでいるわけではないからこそ、敢えて本書でデストピアの予兆とも言える現代の動向を述べて問題提起をしたと捉えるべきである。ハラリは反民主主義的な社会を望んではいない。

そのことは、コロナ禍をめぐっての著書『緊急提言　パンデミック　寄稿とインタビュー』（柴田裕之訳、河出書房新社、二〇二〇・一〇）からも見ることができる。ハラリはこう語っている。「たとえば新型コロナウイルスの感染者数が零になっても、データに餓えた政府のなかには、新型コロナウイルスの第二波が懸念されるとか、新種のエボラウイルスが中央アフリカで生まれつつあるとか、何かしら理由をつけて、生体情報の監視体制を継続する必要があると主張する者が出てきかねない」、と。あるいは、「この危機がどのような結末を迎えるかは、私たちが選ぶのです。もし選択を誤り、ナショナリズムに基づく孤立主義や独裁者を選び、科学を信用しないで陰謀論を信じることを選べば、歴史に残る大惨事を招くでしょう」、と。

政治権力はハラリが懸念するような事態の方を望んでいるであろう。日本でもワクチン接種の機会などを利用して情報を収集し、監視体制を強化しようと考えている愚劣で危険な連中が、政治家や官僚の中に確実にいると考えられる。「（略）民主主義は平時には崩壊しません。非常時に崩壊するのです。ところが、非常時にこそ民主主義が最も必要とされます」、「（略）民主主義では、政府が間違いを犯したときに、自らを修正できます。そこが肝心です」、とハラリは述べている。私たちは、今こそ民主主義を守っていかなければならない。

では、このような問題とも関わって現代文学はどういう姿勢を持とうとしているのだろうか。ここでは、黒古一夫の著書『「団塊世代」の文学』（アーツアンドクラフツ、二〇二〇・六）と高村薫について見てみたい。

四　世代の責任と社会派サスペンス作家に望むこと

本書の「やや長い「あとがき」」によれば、立松和平は自分が小説を書きつづけるのは、「それは世代の責任を負っていると思うからだ」と語ったようで、その言葉に黒古氏は「涙が出

るほどの共感を覚えた」と述べている。この場合の「世代」とは「団塊世代」のことであるが、普通に言われる団塊世代（一九四七年から一九四九年生まれ）よりも本書では少し幅広く捉えられていて、「一九六〇年代後半から一九七〇年代初めにかけての「政治の季節」に青春時代を過ごしていたという共通項を持」つ人たちのことを指す。つまり、いわゆる全共闘世代のことであって、本書で取り上げられている八人の作家、すなわち池澤夏樹、津島佑子、立松和平、中上健次、桐山襲、干刈あがた、増田みず子、宮内勝典は、実際の運動に関わっていなかったとしても、言わば当時の空気を吸う中で自己形成をした作家たちである。

たとえば津島佑子について黒古氏は、「政治の季節」のベトナム反戦運動を体験した「「団塊の世代」特有の反戦意識の延長線上に、津島佑子の「反核・反戦」意識は醸成されていったのではないか」と述べている。あるいは、池澤夏樹の「ベトナム反戦運動を反映した長編」である『カデナ』に言及して、この小説は一九七〇年前後の「政治の季節＝ベトナム反戦」を闘った「ベ平連運動の思想を受け継いだもの、と言うことができる」としている。また、立松和平の『光の雨』における主人公の最期の言葉に関して黒古氏は、「つまり、あの「政治の季節」において「革命の夢を見ていた」のも、また、「いまだこの世に出現したことのない理想の世界を作ろうとしていたのも立松自身であり、あの学生叛乱に参加した者全員の「願い」でもあった」、と述べる。

では何故、あの「政治の季節」のことを、今なお振り返るのかと言えば、昨今の「玩物喪志」の風潮に抗していかなければならないからである。本書で黒古氏は述べていないことであるが、たとえばJ＝F・リオタールの《大きな物語》批判にはそれなりの意味はあったものの、その《大きな物語》が批判解体された後、待っていたのは本書でも用いられている先の言葉、すなわち「玩物喪志」という言葉がそのまま当て嵌まるような状況だったのではないか、と私は考えている。

それはともかく、「玩物喪志」状態に対する異議申し立ては、それはアメリカを中心とする資本主義体制に対する抵抗でもある。言うまでもなく、全共闘運動は資本主義支配に対するプロテストでもあったわけだが、直接その運動には関わっていなく、いわゆるドロップアウトして諸外国を放浪していた宮内勝典の文学にも、その志を見ることができる。黒古氏は、宮内勝典の『永遠の道は曲がりくねる』に論及してこう述べている。「つまり、宮内は「爛熟した近代」＝高度に発達した資本主義

に領導されている現代社会にあって、人間（ヒト）と「自然」との本質的・歴史的な関係性、言い方を換えれば「共生」の有り様を改めて根本から考え直すことを提起していたのである」、と。

二一世紀前半の世界における最重要問題は、今の資本主義を如何に乗り越えるかにあると言っていいと考えられるが、団塊世代文学者の一人である宮内勝典はその問題に向き合っているわけである。日本社会もその最重要問題を突き付けられているのだが、それだけでなく日本社会は特殊な問題をも抱え込んでいるのである。それは天皇制の問題である。私は「昭和文学研究」（二〇二〇・三）の特集「元号と文学」で、「元号と文学――天皇制と文学」と題する論考を書き、その中で戦前の絶対主義的天皇制と戦後の象徴天皇制とは、支配の本質において連続しているということを述べたのだが、桐山襲も同様のことを考えていたことを、黒古氏の論述から知ることができる。また、この桐山襲論が本書の中でも最も読みどころがある論考と言えようか。

桐山襲が『パルチザン伝説』で、「天皇暗殺」を企てた「父」とその仲間たちの物語を語ったことについて、黒古氏はこう述べる。「（略）桐山が戦前（中）の大日本帝国時代から「平和と民主主義」に彩られた戦後まで、「日本」は「天皇制」を温存することで「連続」していた、と考えていたと思われることである」、と。たしかにそうであって、現在日本の支配体制も、その根底は天皇制に支えられている。別言すれば、支配層も支配の拠り所を天皇制に置いているはずである。もしも、天皇制がぐらつくようになれば、自分たちの支配も危うくなると考えているだろう。逆に、天皇制が安泰である間は、自分たちの支配も安全だ、と。桐山襲はまた、沖縄の問題にも関わり続けた作家であるが、黒古氏によれば、「桐山にとって「オキナワ」は、「反日本（ヤマト）＝反天皇制」を可能にするかも知れない「一つの場（発信基地）」だったのである」。

黒古氏にはずいぶん以前の著書となるが、『全共闘文学論祝祭と修羅』（彩流社、一九八五・九）があり、その著作では、全共闘運動の根幹は日本近代・戦後秩序の否定にあり、「この思想は必然的に〈反日の思想〉へとつながっていくものであった」と語られていた。その考え方は本書においても継続されていると言える。

現在、最も活躍中の作家の一人である高村薫は、『作家的覚書』（岩波新書、二〇一七・四）の中の「宗教と市民社会」とい

う短文で、「いくつかの文学賞の選考委員をしていて、最近ふと、社会派の小説が姿を消したことに気づいた」と述べている。この短文の初出は二〇一五年三月の「図書」であるが、現在もその状況は変わっていないだろう。その中にあって、高村薫自身は数少ない実力ある社会派作家である。もっとも、高村薫は梁石日との対談『快楽と救済』（ＮＨＫ出版、一九九八・一二）で、彼女の代表作の一つである『レディ・ジョーカー』に触れて、「社会派小説だとかと言われるのは面はゆい」ということを語っている。

しかしながら、この長大な小説は企業社会の実相が会社のトップたちの姿を通して描かれていて、さらに採用人事に関して差別があったとはっきりと言えないものの、外側の人間から見ればそう取られるような出来事が物語の中心に置かれているのだから、やはり社会派小説と言えよう。少なくとも、高村薫の言うように「社会派の小説が姿を消した」現在にあって、その社会性は特筆に値すると言ってもいい。とは言え、それでは差別の問題が鋭く抉られているかと言えば、必ずしも深く掘り下げられているとは言い難い。おそらく、高村薫自身にその意識があるからこそ、「面はゆい」という謙遜の言葉が出てきたと考えられる。

だが、社会や政治の問題に関しての高村薫の感性、判断力は、実に鋭く且つ真っ当であって、社会派作家と呼ぶに相応しい小説家だと思われる。そのことは先にも言及した『作家的覚書』の数々の発言からも知ることができる。たとえば、二〇一五年二月号の「図書」に掲載された「二分される社会」ではあの安倍政権に関して、「（略）生活者に恩恵が届かないアベノミクスをはじめ、原発再稼働や集団的自衛権行使容認など、必ずしも国民の支持が高いわけではない独善的な政策にひた走っている政権へのこの消極的な承認は、私たち自身がある種の反動的な時代の空気へ傾いていることの証である」、と述べている。続けて、「この空気は六十九年前、敗戦に至った戦争責任に中途半端に蓋をせざるを得ず、結果的に歴史を清算できなかった戦後日本の負債でもある」、と。

あるいは、同書中の「真面目に生きる」では、集団的自衛権の行使について、長年積み上げられてきた憲法解釈を、牽強付会と言うべき事例を論拠にして安倍内閣の閣議決定で反故にしたことについて、「これほど不真面目な所業があるだろうか」、と語られている。靖国神社参拝問題では、この問題について政治家たち（厳密には自民党内のとりわけ保守反動派の政治家たち）が、「個人の心の問題である」と言い、さらには「歴史認

識を政治問題化するな」と言いたがることに対して、高村氏はこう述べる。すなわち、「（略）一国の首相や大臣に「個人の心情」などという逃げ道はありません。だいいち、歴史認識こそ政治の最たるものであって、歴史認識が政治問題でないと言うほうが異様であります」（講演「私たちはいま、どういう時代に／生きているのだろうか」二〇一三・五、同書所収）、と。宜なるかなである。

また同講演で高村氏は、かつての宰相安倍晋三の「非常識な歴史観」について、すなわち先のアジア太平洋戦争はアジアへの侵略ではなかったとする歴史観について、こう述べている。「どんな大義名分を並べても、よその国の領土や国民に対して武力行使をしたら侵略だという当たり前の理屈を、一国の総理大臣が大真面目で否定する光景は、悪い夢でも見ているようです」、と。やはり同講演で、従軍慰安婦問題については、それが軍による強制であったか否かではなく、慰安婦が制度として存在していたこと自体を、世界は人権に反していると問題にしているのだ、と明快に語っている。沖縄の問題に関しては二〇一六年一一月の講演「異化する沖縄」で、問題の多くはアメリカ軍基地が沖縄にあることから来ているが、そういう状況を沖縄に押し付けている日本国家に対する、沖縄の人たちの怒りに眼を向けなければならない、と述べている。

原発の問題については、高村氏はたとえば小説『新リア王』上・下（新潮社、二〇〇五・一〇）で原発誘致の問題を中心に物語を展開している。『新リア王』は、地域振興の餌に釣られて核廃棄物の再処理場を誘致することに、結局は同意する当該地域の政治家たちの話である。要するにこの物語は、政治家たちの選挙のための足場固めなどや利益誘導などと結びついたところで、原発誘致が行われるという物語なのである。この小説はかなり事実に近いことが語られていると考えられる。

こうして見てくると、高村薫は現代の日本社会に対して鋭い問題意識を持った作家であることがわかる。しかも、その問題意識は、先の『作家的覚書』の中の発言に見られるように、正鵠を得たものである。しかしながら、たしかにそうなのではあるが、日本社会を牛耳りながら、庶民にはつまるところ災厄をもたらし、自らは肥え太っている巨悪というものを指弾する文学には至っていないと思われる。たとえば、『マークスの山』上・下（講談社文庫、二〇〇三・一）などで活躍する合田雄一郎警部補のシリーズ物があって、それは興味深いサスペンスとなっているのだが、しかし主人公が警部の物語では、残念ながら巨悪を追うことは出来ないであろう。実際に、合田雄一郎の

シリーズでは、犯行を企てるのは巨悪とは言い難い連中であり、むしろその巨悪によって疎外されている連中とも言えるのである。

高村薫には『リヴィエラを撃て』（新潮社、一九九二・七）のような大きなスケールの小説もあるが、警察官合田雄一郎の背後に奥深く鎮座している巨悪を小説で指弾すべきではないだろうか。たとえば、一国の最高権力者の多分に犯罪の匂いのする利権が絡んだ取り引きを描いた松本清張の小説『聖獣配列』上・下（新潮社、一九八六・一）のようにである。さらには松本清張の『日本の黒い霧』（文藝春秋、一九七三・四）のように、実際の政治的事件について調査力と推理力によってその真相に迫る試みを行っていいと思われる。高村薫には、松本清張の遺志を受け継いで巨悪を指弾してもらいたいと思うが、どうであろうか。

さて、以上のように見てくると、現在の政治社会状況に対峙する思想と文学を、今後さらに展開していかなければならないと考えられるのだが、どうであろうか。

〔付記〕本稿は「千年紀文学」の一二九号（二〇二〇・一）、一三二号（二〇二〇・七）、一三三号（二〇二一・一〇）、一三三号（二〇二一・一）、一三四号（二〇二一・四）、および「週刊　新社会」第一一九二号（二〇二一・一・一）に掲載された小論を論文にまとめたものである。なお、引用や言及した文献については、注記の形を取らず、本文中に明記した。諒とされたい。

（あやめ　ひろはる　本学名誉教授）

キーワード＝コロナ禍、資本主義、天皇制